青牛式トレードマスター講座

マルチタイムフレーム分析の習得

※もう一方のマルチタイムフレーム分析（Power-Point ベース）の資料と相互補完的に読み進めてください。

世の中には、チャートで起こる現象を解き明かそうと、ありとあらゆる理論やツールを持ち出し、トレード自体ではなく、その知識を披露することに熱意を注いでいる人達で溢れていますが、私の見解としては、トレードについて一通りの体系的な知識を学んだ後は、実際のチャートでマルチタイムフレーム分析のケーススタディをどれだけ積むかがすべてだと考えています。

なぜなら、複数時間足の組み合わせは１つとして同じものはなく、表面的な丸暗記は全く意味をなさないからです。

そして、規則と不規則を繰り返す変動相場において、値動きの根底の一つにマルチフラクタルという構造がある以上、マルチタイムフレーム分析は最上級難易度の分析方法であると同時に、最上級精度を実現する唯一の分析方法です。

しかし、習得までの道は非常に厳しく、膨大な経験を通して根底に流れている

本質や構造的な原理を理解しない限り、マルチタイムフレーム分析を習得することはできません。

そして、波形、ダウ理論、サポートレジスタンス、ローソク足形状などを複数の時間足で観察し、 それらを統合的に分析することによってのみ確度の高いトレード判断が可能となります。

複数時間足を同時に分析する上で非常に重要なことは、そもそもが「それぞれの時間足は、異なるものを表しているわけではない。」ということ。

つまり、全ての時間足に共通するその瞬間にたった一つのレートを異なる解像度で見ているにしか過ぎないのです。

そして、マクロ、ミドル、ミクロのすべての時間軸に共通するたった一つのレートが形成する波の軌跡をどのように見るかによって、チャート上で起こっている現象を脳がどのように認識するかが決まるのです。

また、マルチタイムフレーム分析が一定の水準に到達すると、チャートから読

み取れる個別具体的な何らかのシグナルを見てトレード判断をしている、と言うよりは、「全体を全体のままとらえて全体として理解している。」という表現が最も適切だと感じています。

私は、マクロから始まり、ミドル、ミクロ、細かなプライスアクションと、全ての時間軸で起こっている膨大な情報を見極めていますが、それら１つ１つで判断するのではなく、全体の状況との複雑な擦り合わせをほとんど無意識に近いレベルで同時並行的に処理していくことが体に染みついているといった状態です。

そして、マルチタイムフレーム分析によって導き出される実務レベルにおける最大の優位性は、

・確度が高い分析により自信を持ったエントリー

・ストップ位置を限界まで絞り込むことによるポジションサイズ

・値動きの方向性への確度に自信を持つことによる強気なピラミッティング

の３つを挙げることができます。

メンバーズサイトのQ&Aでも解説していますが、青牛式トレードマスター講座を受講する上で、リアルトレードで実践する手法は何でも構いません。

なぜならマルチタイムフレーム分析は、トレーディングにおける手法以前の大前提であり、それによって導き出す環境認識によって手法の是非を判断すべきだからです。

つまり、手法自体はどんなものでもよく、マルチタイムフレーム分析によって確度の高い分析さえできれば、あとはその手法が機能する場面かどうかを判断すればいいのです。

逆にいうと、マルチタイムフレーム分析によって確度の高い環境認識ができないのであれば、どれほど優れた手法であったとしても、その手法が最大の優位性を発揮する場面なのか、エントリー後に逆行する可能性をどの程度含んでいるのか、はたまた、今は何もしない方がいい場面なのかの見極めができないということであり、いつまで経っても手法への確固たる自信を築けないという状況になりがちです。

さらに、マルチタイムフレーム分析が敬遠される「正当な理由」として、現実

世界における単純なもの（要素）の組み合わせは無限の複雑性を表す（構成する）ことができるという原理原則と同様に、マルチタイムフレーム分析では全く同じ組み合わせが存在しないため、「一律に学ぶ・教える」という営みが困難極まりないからだと考えています。

そのため巷の一般説としては、「マルチタイムフレーム分析は難しいし、キリがないから時間軸を限定しましょう。」という浅はかな見解に終始しています。

それによって起こる最大の弊害は、メインのタイムフレームでは完璧なセットアップであるにも関わらず、なぜか思わぬ方向に値が進み損切りにあうという事態が起こった時の解決方法がないことによって、ただの確率論に終始することしかできず、自身が選択する手法にいつまで経っても確固たる自信が持てないという点だと考えています。

私がマルチタイムフレーム分析を相場分析の入り口として選択した最大の理由はここにあって、チャート上で起こる事象に対して、「根拠を厳密に見極めたい」という明確な指針を持っていたからなわけですが、ここをどこまで突き詰めたいかということは個人の性格やトレードスタイルなどによって大きく左右される部分ですから、最終的には各自で到達目標を設定してください。

今となっては、マルチタイムフレーム分析の確度に一定の自信を持っているので（まだまだ磨く余地は十分ありますが)、自身の鉄板パターンに対するセットアップの見極めには確固たる自信を持っており、一般的な資金量に対してドン引きされる位のロットを打ち込みますが、実践レベルでそれを可能にしているのはマルチタイムフレーム分析以外の何者でもありません。（その前提には、地道な検証作業による客観的な裏付けが必要ですが。）

皆さんも、これまでトレード学習をする上で「上位足を踏まえた環境認識は大切」と頭では分かっていても、具体的にどのように分析技術として身につけていけばいいのかという明確な答えを見つけることは難しかったのではないでしょうか。

マルチタイムフレーム分析を身につけることによってどういうトレーディングができるのかは、これまで私がツィッターであげてきた履歴がエビデンスとなっているわけで、それを可能にした背景や具体的な方法をこの講座で伝えていければと考えています。

そして、すでに皆さんも十分理解しているとおり、マルチタイムフレーム分析を習得するための「最も効果的な学習方法」は、日々のリアルトレードの内容を克明に記録したあなただけの完全オーダーメイドのトレードジャーナルの作成・添削・検証の PDCA サイクルだと確信しています。

あえて断言しますが、マルチタイムフレーム分析を短期的に習得することは不可能です。

しかし、その道を「あえて」選択したあなたであれば、この先に待ち受ける困難やその先に見える希望を見据えた不断の努力を全うできるはずです。

何が最も大切かというと、あなたがこれからずっと継続して「一人でも優位性の高い相場分析」ができるようになることです。

私にできることは、自分自身の実体験を通して培った最も効果的だと信じる学習方法を伝え、進むべき道を照らしてあげることだけです。

薄っすらと照らされたその道を進むのか進まないのか、明かりが届かなくなったその先へも自分の力だけで歩み続けることができるのか。

何よりその準備と覚悟ができているのかを常に自問自答し、日々の相場、何より自分自身と向き合ってください。

前置きが長くなってしまいましたが、ここからは具体的にマルチタイムフレーム分析の世界をご案内していきましょう。

私は、マルチタイムフレームのセットアップを次のように区別し上位足から下位足へ落とし込んでいきます。

区分	時間軸
マクロ	W1・D1・H4
ミドル	H1・M30
ミクロ	M15・M5
プライスアクション	M1

〇マクロセットアップ

〈W1〉

・中長期的な方向性の把握。

・大きく伸びるとしたら上と下のどちらなのかの見立て。

〈D1・H4〉

・デイトレとしての方向性

・その日に形成される日足の形成過程をイメージ（重要）

・前日の OHLC からも当日の日足形成過程をイメージ

〇ミドルセットアップ

〈H1・M30〉

・セットアップを把握する上でのメインの時間軸

・H1 と M30 のどちらかでチャートを把握しやすい方を見る

→　自分の場合は、M30 が割と多い

・セットアップが強力であっても上位足の支配下にあるため、その背景を踏まえた分析統合をする必要がある。

〇ミクロセットアップ

〈M15・M5〉

・H1・M30 と同様に見やすい方を選択

・上位足のセットアップが総体的な方向性の見極めに対し、このミクロでのセットアップを見極めることによってエントリータイミングを絞り込むことができる。

〇プライスアクション

〈M1〉

・具体的なエントリータイミングを図るために見る。

・H1・M30 でのセットアップを踏まえ、ミクロセットアップが整い出す過程でポジションを形成していく。

・上位足からセットアップを落とし込んできているため、最終防衛ラインが明確な状態でエントリーしていくことができる。

〇演繹的推論・帰納的推論・仮説的推論

この概念が意味するところは各自で調べてもらうとして、ここではこれらを具体的にどのように実際のチャート分析に使っているかを解説していきます。

まず上位足に顕著なセットアップ（明らかな UTRD 等）が確認できる場合、

当然、下位足では安値を拾うようなエントリー戦略を考えます。

　それとは逆に、下位足で顕著なセットアップが確認できる場合、このセットアップの強度は確かなものなのかを裏付ける根拠として上位足を見ます。

　例えば、M5 スケールでのトレンド転換が確認できる場合、H1 や M30 でどのようなセットアップを迎えているかが重要になります。

　つまり、M5 で顕著な買いのセットアップであったとしてもミドルセットアップではダウントレンドであれば、その優位性は低いと判断できるわけです。

　しかし、これをさらに上位足から捉えた場合、日足スケールではアップトレンドで現在、陰線になっている状況では、総体的なこのミクロセットアップは非常に強烈であると判断できるわけです。

　このようにして、「マクロからの落とし込み」と「ミクロからの裏付け探し」という視点で相互補完的にマクロ⇔ミドル⇔ミクロの時間軸を何度も行き来することで、薄皮を剝ぐようにその時に起こっていることや、これから起こりうることが見えるようになってくるのです。

これまで説明してきたように、これらの例は単発の一つのケースに過ぎないのであって、それぞれの時間軸で起こるセットアップをマルチタイムフレームで捉えた時には「無限の組み合わせ」が存在するわけです。

ただ、その一つひとつの組み合わせと真剣に向き合うことによって、確実にマルチタイムフレーム分析のスキルが蓄積されていき、ある時、「あなただけに分かる法則」を見つける時が来るでしょう。

いくら無限の組み合わせが存在するといっても、レイヤーを変えて見ることによって「似たような組み合わせ」は何度にもわたって現れます。

これこそが、あなただけの「完全オーダーメイド」であって、マルチタイムフレーム分析の習得とはこれを見つけるための旅路なのです。

勘違いしないで欲しいのは、マルチタイムフレーム分析を習得したからといいて相場の値動きがいつでも手取り足取り分かるわけではありません。

むしろ、「分からない時を分からないと認識できること」が重要であって、

「似たような組み合わせ」が現れるその時を待つための明確な指針を持つため

に、わざわざマルチタイムフレームで相場を見ているのです。

まとめると、次の２点に集約されます。

【マルチタイムフレーム分析習得の意味】

あなただけに分かる、「似たような組み合わせ」を高い確度で認識するため。

【マルチタイムフレーム分析習得の過程】

日々のトレードジャーナルを PDCA サイクルで回すことによって、ケーススタディの蓄積を図る。

マルチタイムフレーム分析を習得する上で、なぜわざわざ難しく手間のかかることをやるのかという意味を自覚し、正しい問題設定を敷くことが何よりも大切だと考え解説してきました。

なぜなら、スタートで誤った問題設定をしてしまうと、私のように「何でもかんでもチャートパターンを収集する」ハメに陥り、いつまで経っても自分の勝ちパターンや鉄板パターンを構築できないからです。

相場で生き抜いていくためには、勝ちパターンが一つあれば十分です。

そして、マルチタイムフレーム分析によって、その勝ちパターンの確度を限界レベルまで高めましょう。

繰り返しますが、「分かる部分」と「分からない部分」の境界線を明確にするためにマルチタイムフレーム分析をするのです。

では、その「分かる部分」と「分からない部分」をどのように作るのかということについては、別のコンテンツで解説していきます。

以上、マルチタイムフレーム分析の概念や実践レベルでの落とし込みついての解説を終わります。

ありがとうございました。

あをうし